

会議名	岸和田市スマートシティ推進協議会 第2回推進協議会
実施日時	2026年1月26日(月) 14:00-16:00
場所	岸和田市役所 新館4階 第1委員会室
参加者	<p>【出席者】</p> <p>岸和田市 佐野市長</p> <p>岸和田市総合政策部 西川部長</p> <p>大阪公立大学 阿多教授</p> <p>(株)インテック行政システム事業本部 幡谷様、森様</p> <p>(株)Y4.com 平田様 (オンライン)</p> <p>(株)地域創生 Co デザイン研究所 紺野様</p> <p>(株)アグレックス 安藤様、神前様</p> <p>【事務局】</p> <p>企画課 田中課長、中井特命主幹</p> <p>有限責任監査法人トーマツ大阪事務所 松本、鳥山、森田(記)</p> <p>【傍聴】</p> <p>3名</p>
使用資料	・岸和田市スマートシティ推進協議会 第2回推進協議会 配布資料

1 開会の挨拶

【岸和田市佐野市長】

- 本日は、ご多用のなか、令和7年度第2回「岸和田市スマートシティ推進協議会」に参加いただき感謝申し上げる。参画企業様には、ワーキング活動など本市のスマートシティの取組にお力添えいただき感謝申し上げる。本日は、その取組の結果や成果などを聞くことを楽しみにしている。
- また、大阪公立大学阿多先生には、平素から本市スマートシティ推進にかかるご助言等をいただき感謝申し上げる。本日はどうぞよろしくお願いしたい。

【岸和田市西川総合政策部長】

- 私からは、岸和田市スマートシティ推進の現在地と来年度に向けて、説明させていただく。参画企業及び部会員の皆様には、日ごろからワーキング活動での活発なご議論やご協力に感謝申し上げる。
- 昨年度に、阿多先生をはじめ、(株)インテック様にも尽力いただき、推進協議会を立ち上げ、防災WGを組成し、今年度は、(株)地域創生 Co デザイン研究所様による観光WG、(株)Y4.com様による健康WGを組成し、実証実験の取組を進めてきた。このあと、各参画企業様から実証実験の結果等のご報告をいただくが、1つ1つ小さな成功を積み上げながら、スマートシティの取組を推進していく。一方、実証実験で成果を得ながらも実装につながらないといった課題も見えてきているところであり、何が障壁になっているのかといったところも含め、実装に近づく条件整備を、参画企業にも知恵をいただきながら一段と進めたい。

- 本推進協議会は、意思決定の場であるとともに、各 WG での取組から得られた学びを共有する場であるため、参画企業様には、活発な意見交換をお願いしたい。

2 令和 7 年度の活動報告

- 事務局から令和 7 年度の活動スケジュールについて説明。
 - 本推進協議会は、7 月に令和 7 年度第 1 回の総会を開催し、本日が第 2 回目となる。本日の協議会に至るまで、運営委員会を開催させていただき、今年度の実証実験の検討状況の共有などを行っている。本日の推進協議会では、今年度の実証実験の報告とともに、新しく発足する WG のご承認をいただく。令和 8 年 3 月は、年次報告を書面にて開催する予定である。
 - つづいて、WG 及び部会のスケジュールについて、各 WG の実証報告、部会の公募結果について、後程、詳しく説明があるので、ここでは全体の活動スケジュールの概要について説明させていただく。防災 WG については、昨年度からの継続 WG になるため、昨年度の取組の振り返りから始め、実証に向けての課題感の共有や実証実験の検討を進めてきた。こちらは、次年度の実証実験を目指して進めている。健康 WG と観光 WG については、今年度新たに発足した WG であるので、事業実施に向けての現場職員との課題感の目線合わせなどから開始し、参画企業の持つサービス・技術の確認・共有を行い、実証実験の検討、そして、年内での実証実験の実施、その後の課題整理等を年度内に行うスケジュールになっている。一方、部会については、今年度改めて参画事業者の公募を行い、新 WG を発足するスケジュールになっている。

【防災 WG（インテック）】

- 活動スケジュールについて、今年度は前半と後半で 2 つのテーマの検討に取り組んだ。7 月から 9 月には、災害対策本部での情報収集の整理に用いるクロノロジーのデジタル化を目指して議論を行っていたが、10 月に大阪府から類似システムの導入を検討中の案内があったため、10 月以降は新テーマの検討を行っている。
- クロノロジーのデジタル化について、実証実験のテーマを「災害情報の収集～庁内でのクロノロジーダッシュボードによる情報共有のデジタル化・効率化の検証」として検討を進めた。庁内の課題は 2 点あり、1 点目は情報伝達・共有の遅延・経路の複雑化である。現状では、情報共有が紙媒体と口頭に留まっている。また、情報受付のパターンが複数あり、庁内の伝達経路が複雑化していることに加え、指揮層が判断する事案、各担当が判断する事案について判断基準が統一されていないことが判明した。また、指揮層が判断する場合、情報の認識が最後になってしまい、情報受付から判断までに時間を要していることも判明した。2 点目は、クロノロジーダッシュボードの管理負担・機能不足である。現状では、Excel のマクロで作成しており、管理・メンテナンスが一部の職員に属人化している。そのため、発災時に使おうとするとファイルが使えない可能性があることが分かった。また、リアルタイム性がなく入力の重複・整合性の確認が困難であることも判明した。

これらの課題を踏まえ、デジタル化の設計を検討した。主に住民や関係各所から情報が連携されたら、すぐに情報をデジタル化することを検討した。具体的には情報をシステムで管理し、紙への記入を省略するとともに、情報伝達の経路を簡潔にしたうえで、履歴管理、ステータス管理も可能になった。さらに、情報整理の効率化に向けて、クロノロジーダッシュボードで府内全体での情報共有にリアルタイム性を持たせることによって指揮判断のスピード向上をめざす取組についても検討した。これらの検討により、①実証計画、②実証シナリオ、③検証観点の3点を整理した。これら整理したこととは、大阪府のシステム運用の検討においても、活用できると考えている。

- 新テーマの検討について、現在、①優先テーマの選定、②次年度計画の策定という流れで取り組んでいる。①優先テーマの選定については、多数の課題から優先テーマを選定するために、課題ごとに現状（AsIs）と目指す姿（ToBe）のギャップを明確にし、解決方法を導き出す予定である。次年度計画の策定については、①で選定する優先テーマについて次年度計画を策定する。
 - ① 優先テーマの選定については、課題を8つのテーマに分類し、現状を深掘りする。そのうえで目指す姿とのギャップを明確にし、解決方法を導き出す。例えば、市民の平時における状況としては、若者の町会等への組織加入率が低い、広報活動の注目度が低い、防災意識の持続力がないなどの現状が明らかになった。また、市民の発災時における状況としては、情報取得の行動については、発信する情報が限定的であることや、電話での問い合わせが多いことなどの現状が明らかになっている。

【健康WG（Y4.com）】

- 「朝食欠食率の改善」をテーマとして取組を実施した。募集については、校長会を経由して周知を実施した。毎日少しづつ学ぶ「マイクロラーニング」を通じて、朝食に関する正しい知識の定着と行動変容を促すことを目的に、岸和田市内在住の小学校低学年の児童を持つ保護者を対象に実証を実施した。実施期間は2025年11月4日から12月5日で、健康アプリ「Vital Gain」内にて毎日、25日間、全70問の食育クイズと解説を配信した。
- 参加・回答状況について、完走層（25日全て取組に参加した率）は、74.5%であり、20日以上継続率は78.4%であった。最初の1週間から10日間で習慣化できるかが継続の鍵となる。
- 回答頻度について、完走層（25日完走）は3.44日に1回、準完走層（20日から24日）は2.76日に1回回答していた。完走層・準完走層は、いずれも2日から5日に1回のペースで回答を継続しており、毎日強制されるのではなく、生活の中で無理なく取り組める頻度が、長期継続を実現した。
- 朝食の重要性と栄養バランスへの意識の変化について、約9割の参加者が朝食の重要性や栄養素への理解が深まったと回答した。クイズ形式による学習が、知識習得と意識変容を効果的に促進したことが確認された。
- 学習内容の理解と実践について、93%の参加者が理解でき、学んだ知識を生活へ活用すると回答した。また、今後の朝食習慣の継続は100%で、全員が継続意向があるとの回答であった。本プログラムは単なる知識提供にとどまらず、参加者の行動変容への強い動機付けとして機能したこと

が確認された。

- 朝食摂取頻度の変化について、「朝食摂取頻度が増えた」と回答した方が 6 名おり、そのうち、5 名（83%）が「クイズ・解説の影響」と明言しており、本取組が行動変容のきっかけとなったことを示している。ただ、朝食摂取頻度が「改善した」と回答した人の中には、事前アンケートで「毎日食べている」と回答していた人も含まれており、アンケートの各設問の解釈の違いが生じていた。しかしながら、参加者自身が「変化した」と実感している点には意義があると考えられる。
- 朝食内容の改善について、朝食内容が「改善した」と回答した 13 名全員がその理由として「クイズの影響」と回答しており、摂取頻度（量）だけでなく、食事の内容（質）においても具体的な改善が見られた。
- 今後のプログラムへの期待について、クイズ・ゲーム形式の継続や試食会などの体験型プログラムの実施が挙げられた。また、内容・テーマについては、睡眠、運動、親子できる体操などの健康テーマや、防災知識、子育て、お金・税金など生活全般への関心などが挙げられた。プログラム全体の満足度は、93.5%であった。
- 本取組から得られた 4 つの重要な知見は、①事前イベント・説明会なしでも高い利用開始率であった、②利用開始者の大多数が長期継続した、③継続しやすいペースが傾向として把握できた、④食育×クイズ形式の高い親和性があることである。
- 来年度以降に向けては、①市との他事業との連携強化、②健康テーマの拡張、③効果測定の高度化、④ターゲット層の拡大、⑤インセンティブ設計の最適化の検討事項が考えられる。

【観光 WG（地域創生 Co デザイン研究所）】

- 今年度は、スタンプラリーを活用した市街地のウォーカブル観光に関する実証を行った。11 月 29 日（土）11 時から 14 時で開催し、岸和田駅からスタートし、商店街や五風荘を巡るルートで実施した。訪問スポットはトータル 13 スポットで、3 か所のスポット訪問を必須とし、合計 4 か所以上周遊してもらった。
- 実証は、岸和田市への訪問前後の変化をデータで把握することをポイントに実施した。主な観光地やお店の計 13 スポットに協力いただき、実施した。実証においては、個人のアンケートや訪問時ログを取得した。大阪北部在住の方を中心に、平均 40 代後半の方に参加いただいた。参加前のアンケートでは、歴史文化・食べ物、および新しい場所への嗜好性が高いことが分かった。事前の NPS（お勧め度）は、消極的な意見が多く、岸和田と言われて思い浮かべることは、「だんじり」をイメージする方が多かった。
- 実証参加後は、NPS（お勧め度）が 80 ポイント向上し、来訪すればお勧めのまちになることが把握できた。NPS 向上につながった可能性のある体験価値としては、きしわだ自然資料館、杉江能楽堂、五風荘などが考えられる。
- 総合満足度と個別満足度との相関について、「高相関 * 高満足度」と回答した方が多く、定番・人気スポットに行けたことが要因であると考えられる。アンケート結果と個別スポット（ログ）から想定される定番・人気スポットは岸城神社が挙げられる。

- NPS 平均スコア変化（スポットを訪れた人の平均スコア変化 – 訪れていない人の平均スコア変化（＝平均差））について、杉江能楽堂を訪問された方が、NPS の変化が高かったことが分かった。
- 詰まりどころ（課題）と次に試したいこと（次年度の一手）について、スマートシティの観点から、デジタル化のサポート、特にデータ分析（数値データだけでは見えなかった情緒の把握）、AI 活用のサポート、仲間づくり（連携先強化）などの取組を実施したい。また、具体的な観光施策としては、新しいターゲットに向けたメッセージ・事業を提示できると考えている。

3 新規 WG の発足と今後の進め方について

- 事務局から令和 7 年度の活動スケジュールについて説明。
 - 今年度、8 月から 10 月にかけて、教育部会及びデータ連携・利活用部会において、新たな参画企業の公募を行った。教育部会については、解決したい課題として、「必要な人に必要な情報が必要なときに届かず、学びの機会が取りこぼされている」状況や「PDF や複数媒体での情報分散、検索困難なデータにより情報取得が困難である」という状況があるということで、提案をもらいたいサービスイメージ案としては、「PDF や Excel などの非構造データの自動オープンデータ化と属性別のプッシュ型配信機能など」を求めた。こちらは、選定事業者はなかった。つづいて、データ連携・利活用部会については、解決したい課題として、「市民からの電話問い合わせが多く、集中している一方、問い合わせ内容の傾向や市民ニーズが可視化、分析されていない」状況や「市民の聞きたい FAQ が示されていない」という状況があるということで、提案をもらいたいサービスイメージ案としては、「音声データの文字起こしと分類・傾向分析及び想定 FAQ の自動作成など」を求めた。
 - 新規 WG の発足にあたり、新たな参画企業の（株）アグレックスから、提案内容について、WG の狙いや到達イメージ、想定される実証内容やスケジュールなどご説明いただく。説明をうけて、WG の発足にあたり、推進協議会の承認の手続きを行う。

【データ連携・利活用 WG（アグレックス）】

- 現在、電話での問い合わせが集中しており、市職員は通常業務と問い合わせ対応の両立て業務が逼迫している。また、問い合わせに関する体系的整理もできていない状況である。これらの状況を可視化し、チャットボットによる QA を作成することで、市民が電話で問い合わせをしなくても困りごとを解決できるようになるとともに、職員の負荷軽減を目指す。
- 今回の実証実験では、市民からの問い合わせ電話に焦点をあて、テキストデータをマスキングのうえ、相関を可視化する。分析結果に基づき QA を作成するとともに、改善に向けた施策を検討する。
- 実証実験では、①テキストデータから、個人情報や秘匿情報をマスキングするためのパラメータ調整に取り組む、②マスキング後データからツールを用いて、QA を自動生成・評価する、③分析ツールで問い合わせ傾向を検証する、④自動生成された QA を実際に市民の方が使いやすい内容になっているかどうかを検証するとともに、QA 作成に要する要員・時間を測定し参考値化する、⑤生成 AI の分析結果と VextMiner の結果を突合せ評価する の 5 点の確認ポイントの検証を通じて、実

証の有効性と課題を明確化する。

- 実証実験の想定スケジュールについて、来年度は、音声データの加工から分析・評価・調整を想定している。再来年度は、音声テキスト分析結果の最終評価を踏まえて、実装に向けた議論を行う。
- 検証範囲における QA 確認について、市民からの問い合わせ音声データを岸和田市にてテキストデータ化する。その内容を踏まえて、アグレックスにて、マスキング、テキストマイニング、分析結果の評価などに取り組む。すでに、連携方法、提供データの形式、生成 AI の活用、マスキング対象の項目、セキュリティ要件などについては、岸和田市との議論を進めている。
- 事務局から（株）アグレックスの参画可否の確認。
 - 本説明をもって、（株）アグレックス様には、岸和田市スマートシティ推進協議会の会員として、データ連携・利活用 WG を主導していただくことのご承認をいただきたい。委員の皆様の拍手をもって、賛成の意をご表明いただきたい。
 - 拍手をもってご承認（委員）
- 参画企業の選定に至らなかった教育部会については、本部会が焦点化している課題感や課題解決に資するサービスイメージについて、内容の見直しによる再公募を実施するか、または、推進協議会参画企業様との連携も視野に入れた取組継続の検討を行うかという選択をもって、検討を進める。

4 令和 8 年度の活動方針（予定）

- 総会、運営委員会、府内組織である推進委員会の 3 つの主要な会議体があり、それぞれの開催頻度や役割を整理した。総会については、令和 8 年 7 月下旬ごろに開催し、公募案の承認、令和 8 年度実証実験内容検討状況の確認、令和 9 年度実装事業検討方向性の提示を行う。次に、令和 9 年 1 月頃に開催し、実証実験の報告や新 WG の承認を行う。その後、3 月頃に書面開催で、年次報告や令和 9 年度事業計画の承認を行う。運営委員会及び推進委員会、事務局については、説明を割愛するが、各会議体で情報共有しながら、岸和田市におけるスマートシティの推進を進める。
- 「令和 8 年度における WG 及び部会の実施スケジュール（案）」について、年度を通じて「防災」、「健康」、「観光」、「データ連携・利活用」のテーマ毎に WG を運営し、事業の実証や企画を進めていくが、実際の活動は各 WG、パートナー会員と調整のうえ進める。各 WG とも実証の成果等を踏まえ、実装への可否及び継続実証の判断を行い、岸和田市にあった取組を進める。部会については、教育部会での議論を踏まえ、岸和田市スマートシティ推進協議会におけるパートナー会員の募集を検討する。また、岸和田市スマートシティ推進協議会への新たな参画形態として「サポート会員」制度の検討を進める。現在の検討では、「サポート会員」は、参画の登録制とし、推進協議会を通じた意見・情報交換等が主な役割としてイメージしている。ゆくゆくは自社のノウハウ・ソリューション等を活用し、パートナー会員（WG の構成員）として事業関与していただくことが考えられる。

5 協議会参加者意見交換セッション

【前年度の総括など】

- (インテック) 昨年度から参画しており、今年度は岸和田市 WG メンバーの皆様から、本音ベースのご意見をいただけたと感じている。一方で、今年度は実証を実施できなかつことを心苦しく感じているが、次年度以降も検討を進めたい。課題は、大阪府 ORDEN との連携強化と他 WG メンバーとの協働による取組の実施などである。
 - (阿多教授) 大阪府のシステムに対して現場の意見・ニーズは反映できそうか。例えば、初動の段階で情報を全てそろえることは難しく、情報を都度入れていく設計にする必要があるなど、現場視点での意見を提示することが重要になる。大阪府のシステムが出来上がってから使いにくいものであることが判明しないように、留意が必要である。
- (地域創生 Co デザイン研究所) 公募段階では、デスクトップ調査から得た情報で検討を進めていたが、WG での議論や実証を進める中で、岸和田市の魅力が可視化できたと考えている。反省点は、実証の時間（2 時間程度）が少ないとの意見が多かったため、事前にニーズとポテンシャルを把握しきれていなかった点である。観光の観点では、岸和田市は様々な取組を進めているので、単発の観光施策ではなく、既存の施策や継続中の施策と連携することで、より効率的に取組を進められるとともに、データ活用も進められるのではないかと考えている。
 - (阿多教授) 今回は市街地のみであったが、全域を対象とすることも考えられるか。
 - (地域創生 Co デザイン研究所) 今回の実証では、予算上の制約も踏まえ、市街地に限定したが、今後は検討を進めたい。
- (Y4.com) 今回の取組で上手くいった点は、事前説明会などを実施していないにもかかわらず高い参加率・継続率を達成できたことである。反省点は、アンケート設計が、前後比較が難しい内容になっていた点である。今回の実証では、健康分野における食育に限定した内容であったが、今後はより広く健康をテーマに取り組むのがよいと考える。
- (アグレックス) 参画動機としては、令和 6 年度の公募にも応募したが、社内事情により参加を辞退した経緯がある。そのため、令和 7 年度に再度応募し、2 年越しの想いをもって参画している。当社は、民間企業向けのコールセンターサービスを提供しており、公募内容との親和性が高いことに加え、大阪スマートシティパートナーズフォーラムでサービスを説明した際に、自治体からのお声かけが多かったことも踏まえて応募した。すでに豊中市と取組を進めているため、そのノウハウも生かしたい。

【住民が「使いたくなる」仕掛けの横展開（取組の持続性）】

- (阿多教授) 実証なども踏まえ、住民が「使いたくなる」ような、住民の参加を促す仕組みについて、ご意見を聞きたい。
- (インテック) 町会等への組織加入率や広報活動への注目率の低さは、防災領域に限らず他領域にも共通する課題である。また、岸和田市に限らず全国的な課題でもあると考えている。一方、住民による観光ガイドという観点では、まちに愛情を持つ住民を生み出す仕組みを検討する必要がある。

- (Y4.com) 今回の実証では毎日配信・毎日回答という形式を取ったが、今後は市の取組に合わせて期間ごとにテーマを絞って実施することや、市民全員を対象するために、介護予防の領域をテーマにし、医療費削減を目標としてはどうか。また、平時は健康領域をメインに利用し、災害時には防災領域でも利用してもらうなど WG を超えた連携も考えられる。
 - (阿多教授) マイクロラーニングは、分野を超えた内容の設定などは可能であるか。
 - (Y4.com) どのようなテーマでも問題を作成できれば、対応できる（防災テーマのマイクロラーニングも実施できる）。
 - (阿多教授) 次フェーズでぜひ議論を深めていただきたい。
- (地域創生 Co デザイン研究所) 観光への参画には、参加者自身がマイクロツーリズムを楽しむパターンと、観光ガイドとして参加するパターンの 2 つがある。今回の実証では、ガイドの方にご案内いただき、非常によい内容であったが、その後つながりが切れてしまう点が課題である。デジタルを活用して、そのようなつながりを継続できるとよい。アプリのようにログを確認できる仕組みがあれば、職員の活用にもつながるのではないか。
 - (阿多教授) 関わった方のつながりを継続する仕組みの構築は重要である。多くの実証では、参加者のつながりが実証の場限りで途切れてしまっている。例えば、実証参加者をデータベース化することで新たな実証をご案内するなど、関心層に対してどのように情報を届けるかという観点は重要である。企画課にもぜひ検討いただきたい。
- (アグレックス) 私自身、現在、自治会長を担っており、自身の自治会でスマホアプリ（回覧板の閲覧、会費の徴収、年間スケジュールの発信、災害時の連絡機能、避難場所の提示など）を導入した経験がある。現在は自治会のみで利用しているが、これが市全体に導入されたり、他領域にも広がったりするなどの可能性があるのではないか。
 - (阿多教授) 個別の取組で人を集めることは難しい。スーパーアプリの構築ももちろん良いが、各社のアプリをつなげるという方法もある。個別サービスで集めた ID を他サービスに誘導する仕組みの構築が求められている。
 - (阿多教授) 一つの例として、大阪公立大学では、リリースしたアプリの利用率を上げるために、そのアプリでしか講義の出欠を取れないようにした。その結果、1 年生のアプリ利用率は 98% となっている。したがって、このアプリ上で通知すると、1 年生全員に届くことになる。利用者を増やすという観点では、地味ではあるが日常的に利用する機能を付与することでまずは利用者を増やし、その利用者に対して新たなサービスを提供するという進め方も考えられる。

【生成 AI との関わりについて】

- (阿多教授) 私も、プログラミングに生成 AI を活用しており、生産性の著しい向上を感じている。業務に生成 AI を活用すると、さらに生産性が高まり、作業スピードや内容も変わっていくと考えられる。各 WG での生成 AI の活用についてご意見を聞きたい。
- (アグレックス) 今回の実証でも、分析には生成 AI を活用する予定であるが、精度や正確性の確認は必要である。今後は、電話応対にも生成 AI を活用し、回答まで自動で完結することが考

えられる。

- （地域創生 Co デザイン研究所）すでに業務に生成 AI を活用している。データ量がしっかりとあれば、データの深掘りにも活用することができるようになっている。個人情報保護に留意したうえで、岸和田市のファンのデータを蓄積することができれば、例えば、岸和田市の観光ツアーを自動で組んで提案することができるツールを公開することもできる。
- （Y4.com）先日、生成 AI サービスをリリースした。利用者の健康に関する質問に対して、ご自身の PHR データを踏まえたアドバイスを回答するサービスである。
- （インテック）生成 AI は回答を提示するにあたり、根拠となるデータが必要である。そのため、正確かつ最新のデータが、生成 AI が認識できる形式で公開されている必要があることから、今後はデータの整備という観点がより重要になる。
 - （阿多教授）非常に重要な視点である。できる限り生データやリアルタイムのデータを格納すれば、データ分析や整形はむしろ生成 AI の得意分野である。

6 閉会（岸和田市総合政策部田中企画課長）

- 皆様、本日は、令和 7 年度第 2 回岸和田市スマートシティ推進協議会にご参加いただき感謝申し上げる。本会議を滞りなく進めることができたのも、皆様のご協力あってのことと考えている。感謝申し上げる。参画企業の皆様とともに、今後一つでも多くの取組を進めてさせていただき、市民の皆様にとって実感できるものにしていきたいと考えている。
- 前回の協議会では、大阪府にも参画いただき、データ連携基盤 ORDEN やマイド・ア・おおさかのご紹介等をいただいたが、本市においても、マイド・ア・おおさかのサービス運用が開始している。次年度に向けてサービスの拡充を進めているところであるので、皆様もぜひ、登録いただきたい。

以上